

北海道えりも町内に残る江戸時代開削の猿留山道について

中 岡 利 泰^{*1}

I. はじめに

北海道幌泉郡えりも町は、北海道南西部に位置し、太平洋に突き出た襟裳岬を中心とした東西に広がる海岸線を有する。日高山脈襟裳国定公園に指定されている日高山脈が太平洋と接する地域でもある。この日高山脈が太平洋と接する地域には海岸段丘が発達し¹⁾²⁾³⁾、段丘上に今回紹介する猿留山道が江戸時代寛政十一年（1799）に開削され、現在でもその一部が現存し、歴史や地域の自然を学ぶ場として活用されている（図1.）。

本稿の目的は、猿留山道の歴史的経緯をまとめ、その歴史的価値を見出すことにある。

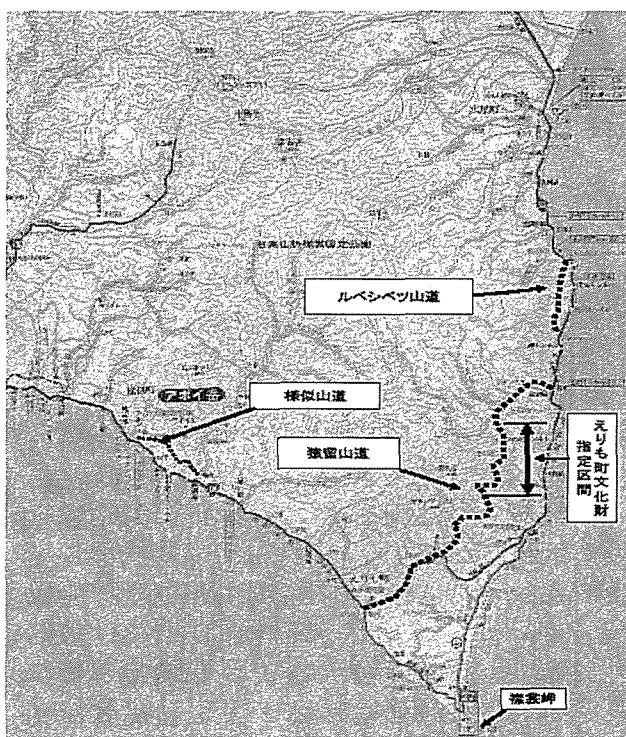


図1. 北海道日高山脈南端における三山道
(ルベシベツ山道、猿留山道、様似山道) の位置。
<昭文社のレジャーガイド北海道
(1991) に加筆>

*1 えりも町郷土資料館
erimomus@cocoa.ocn.ne.jp

II. 北海道（蝦夷地）における道路開削の歴史

北海道道路史⁴⁾によると、松前藩が成立したのを、徳川家康から授かった黒印書の年とすると慶長九年（1604）である。「松前藩領内には米が生育しなかったので、藩士には領土を数多くの場所に区画して給与した。この給地を「場所」と称し、給地を有する者を場所持ちと称した。場所制は交易を行い、主として現物税を徴収する制度であって、一定地域内において1ヵ所を指定して独占的に行わせたので、諸国から商品を積んだ交易船が場所場所に集まり、(略) 後で、商人の請負制度となつてますます大規模となり、請負人は藩士に運上金を納めて勢力を張るに至った。(略) 本州と北海道あるいは北海道内の交通は海上交通を主体としていた。その後、寛永年間（1624～1644）に蝦夷地と大阪を往復する西周り航路の北前船が、寛永二年（1625）には蝦夷地～江戸間の東周りの航路が発達した。「この時代、(蝦夷地の) 陸地の交通は海上交通より不便であり、寛永九年（1632）に松前藩封地内の里程をさだめたことがあったが、道路の開削をおろそかにしたため、和人住居の地でも完全な道路はなく、(略) 蝶夷地では開削された道路も橋梁もなく、わずかにアイヌの往来した経路があるだけであり、馬の飼育もしなかつたので、往来は極めて不便であった。したがって和人が蝶夷地を旅する時は船にたより、たまたま陸路を行く者があつても海岸を行き、難所は船で越えるのが普通であった。」⁴⁾

また、東蝦夷地、西蝦夷地の道路状況について、次の通り詳細に記されている。

「松前から蝶夷地に行くには海路が便利であったが、冬期間は危険を伴った。陸路では東蝦夷地には茅部峠から大沼と駒ヶ岳の西側を経て森に出て、海岸沿いに長万部を過ぎ、礼文華の嶮は船で海を渡り、これから東は海岸を歩行して、虹

田、幌別、白老、勇払、浦河を経て様似に至った。様似・幌泉（現えりも）および広尾間は有名な難所で、平穏な日でも岩礁を伝って辛じて通過し得るほどであったという。広尾から海岸線を行き、大津、白糠、釧路を経て仙鳳趾（尻羽岬）に至り、ここから船で厚岸に渡り、厚岸から陸路で根室に達した。

西蝦夷地へは久遠までは海岸を歩行し、太田・狩場・雷電・神威・雄冬などの難所は船で越し、その中間の太櫓～瀬棚間、島小牧～尻別間、岩内～古宇間、美國～古平間、余市～厚田間は海岸を歩行した。増毛以北は平坦であったから、苦前・天塩・宗谷・紋別・網走を経て遠く斜里に至るまで歩行することができた。（略）

当時の蝦夷地は全くの未開発で、開削した道路も架設した橋もなく、僅かにアイヌを案内役に雇ってたどり歩き、アイヌの舟に乗りアイヌの家に泊まって往来するより他はなかった。特に陸行して海岸の難所を船で越すときは、神に木幣をさ捧げて祈り、帆を下して謹慎して通つたといわれる。⁴⁾

猿留山道開削前、函館から太平洋沿岸を根室まで海岸線を通行した記録は次の通りである。

以下、猿留山道通行の記録、出典の解説は、森勇二氏の資料提供によるものである。ここに感謝の意を表します。

寛政三年（1791）「東蝦夷道中記」⁹⁾には
シヤウヤといふ所蝦夷家ニ軒あり、夫よりトセップ辺より海岸石にて、ウツマイ辺ウエンベツ辺皆岩浜にて、此辺都て北に通る。サルイツに至るは岩頭横に伝はる事數度、風荒吹ては中々歩難致、高き岩の腰を蟹の如く横に伝はるなり、尖りたるところに手を掛け、或は岩の割目に足の指を挟み横に行く、或は石垣崩れたる如くに一円石浜続の所は、庭の飛石を行くが如く、丸き石に飛付けば足下すべり、尖りたる石に飛付けば足痛み、草鞋の切るる事至て早し、それより仮小屋あり（猿留）、
と難行の様子が表現されている。

近藤重蔵から古河古松軒への通信¹⁰⁾
には、
六月二日「アフタ」出立「ミツイシ」「ウラカワ」「シヤマニ」を経て「ホロイズミ」に出（シラヲイより

凡八日路）「えりも」と云ふ。海中へ凡三里許も突出たる出崎にて、廻船は箱館、江差より此「エリモ」を見て乗り、東蝦夷の風土も此崎の前後に一変すと云ふ。「シヤマンイ」より「ホロイズミ」「ビロウ」の間險阻尤多く嶺巖絶壁突凸として馬足不通、其間「ケコシキルイ」「トモチクシ」等の嶮、蟻附蟹歩始て魚腹を免れ石頭岩牙を躍歩し、飛泉を登り水中を行て始て「ビロウ」へ出、

と記述され、切り立った崖下の海岸を歩く苦労の様子が記述されている。

猿留山道開削前の絵図を図2.に示した。襟裳岬付近の陸路は海岸線近くに描かれ、山中には描かれていない。

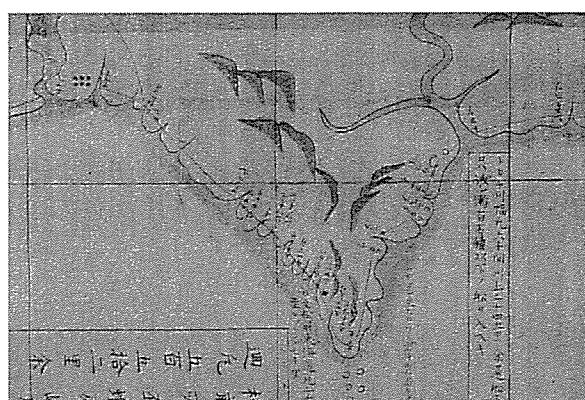


図2.「蝦夷加賀多骨奈誌利月多六福猶虎島写図」
最上徳内（1790）（北海道大学附属図書館
北方資料室蔵）

鎖国令の下、寛永二十年（1643）には厚岸にオランダ船が来泊。正徳元年（1711）ロシアが千島列島の幌筵島、占守島、温根古丹島に進出。明和四年（1767）には択捉島、明和八年（1769）得撫島に進出した。安永七年（1778）根室半島ノツカマップに到着するなど、ロシアを中心にオランダ・スペイン・イギリス・フランスが蝦夷地や千島列島周辺に進出著しかった。幕府は天明年間（1781～1789）に幕吏に蝦夷地権太などを調査させ、ロシアの南下が強まっていることを知り、蝦夷地の防備と開拓の必要に迫られた。寛政四年（1792）ロシア使節ラスクマンが根室に来航するなど、ロシアの南下が盛んになり、幕府は北辺の状況探査と蝦夷地経営を積極的に推進する必要性から、寛政十年（1798）180人からなる「大規模な巡察隊を蝦夷地に派遣した。寛政十年（1798）十二月松平忠明が蝦夷地取締

御用掛を命じられ、寛政十一年より蝦夷地は幕府が管理することとなる。⁴⁾

蝦夷地（北海道）における山道開削の歴史を表1.に示した。

江戸幕府が蝦夷地を直轄したのは、寛政十一年（1799）～文政四年（1821）と安政二年（1855）～の二期であるが、財政難のため山道開削を場所請負人などに出願させ実施している。松前藩復領期には山道開削の記録はない。

III. 猿留山道開削の歴史

猿留山道が開削される前年、寛政十年（1789）蝦夷幕府が派遣した蝦夷地巡察隊に近藤重蔵が参加し、国後択捉島からの帰路、広尾で風雨に見舞われ海岸沿いに通行することができず、山道開削の重要性を身に染みて理解し、従者下野源助

（本名：木村謙二）に指揮させアイヌ68名を使って広尾ルベシベツ～幌泉（現えりも）ビタタヌンケ間三里のルベシベツ山道を開削した。これが蝦夷地における最初の山道開削とされている。当時は松前領であったことから近藤重蔵は独断であえていたのである。^{4) 6)}

松前領から江戸幕府直轄になり、蝦夷地や千島列島を南下するロシアなどから警備し、蝦夷地経営を推進するためにも陸路の整備が不可欠であり、函館松前～根室までの東蝦夷地海岸の陸路の整備が必要とされた。

海岸線通行の困難な場所の一つが、幌泉（現：えりも）～広尾間、様似～幌泉間の日高山脈が太平洋に断崖で接している区間であった。通行が天候に左右され、外国船の接近、上陸、交易打診など急務な事象の伝達が安定しない状況を打破し、北方警備にも役立てるために、江戸から奥州街道を抜け、東北諸藩をとおる仙台道、津軽海峡を渡り松前函館への松前道、そして、蝦夷地の太平洋岸を根室まで陸路でつなげる陸路が、国土防衛・北方警備の一つとして整備された。その一区間が、猿留山道であり、様似山道である。

猿留山道の開削に携わった一人最上徳内は「蝦夷草紙」に道路開削の急務とともにかく安全に通行することができるようになったことを、次の通り記した。¹¹⁾

15年前から蝦夷地に体を痛めつけながらも従事すること17年になり、一命を覚悟したこと三度もあるけれど、大きな仕事である新道係になったのはありがたいと思い、粉骨を尽くして新道を開き、永続的に使えるようにしたいと、1799年6月21日（旧暦：五月十八）に作り始めたが、丁寧に作ることはよくないこととして、7月10日（旧暦：六月八日）に罷免され、よんどころなく引き去り、ここからクスリ場所まで行き、なんの事もなく旅行だけをして帰ってきた。帰りの時、新道の様子を聞くと、ショウヤというところには、新道三筋を付けたけれど、この道を通る者はいないという。莫大な公金を費やして通る人がない道が三筋もあるのは、無益の支出で、もったいなく異常だ。数万両のお金を使って、後年になり開国の跡が残るのは新道だけである。（略）

以下、「蝦夷草紙」の編者である吉田常吉の注を引用する。¹¹⁾

新道の開削

蝦夷地は元来天険が多く、交通に不便で、海岸に添うて船を進めようとすれば、風に阻まれてむなしく逗留せねばならず、一朝事ある時に急を報することは容易ではなかった。それで幕府が東蝦夷地を直轄すると、道路の開削を急務の一つとして、水越源兵衛、最上徳内、中村小市郎、小林卯十郎、らに工事の担当を命じ、蝦夷地取締御用掛大河内政寿が様似に出張して監督し、南部より仙夫・人夫を募集して様似山道（様似・ホロイズミ間）、猿留山道（幌泉・鏗田貫（ビタタヌンケ）間）などを開削した。ことに猿留山道は、その里程が長いこと、険急などによって、東蝦夷地第一の難道と称されたものであった。すなわち幌泉・猿留間は、従来海岸に沿うて襟裳（襟裳岬）を迂回し、しかも庶野・猿留間の海岸は、岩礁が多く、すこぶる難所であったので、寛政十一年（1799）新たに才タベツ川の渓谷を遡り、トヨニヌプリの中腹を通り、サルル川の中流に出て、海岸に至る道路を開削した。これらの道路はみな工事を急いだので、完全とはいえないが、同年の秋には、サマニから釧路まで馬を通すことができるようになり、その後次第に修築して、東海岸一体は、天候の不良な日でも、ともかく安全に通行することができるようになった。

表1. 蝦夷地（北海道）における山道開削年表（1／2）

北海道道路史⁴⁾ 新北海道史第二巻通説⁵⁾より引用し、他の情報を追加し作成した。

開削年（西暦） 名称・位置・距離	備考
寛政十年（1798） ルベシベツ山道 幌泉ビタタヌンケ～ 広尾ルベシベツ約3里	近藤重蔵が国後島択捉島調査の岐路に開削、 私費 ⁵⁾⁶⁾
寛政十一年（1799） 長万部～虻田（礼文華山道）	松前藩（幕領となったのは寛政十一年八月のため、松前藩に開削させた。） ⁵⁾
寛政十一年（1799） 猿留山道 幌泉コロップ～猿留 7里	江戸幕府官費
寛政十一年（1799） 様似山道 冬島～幌満 3里弱	江戸幕府官費 享和二年（1802）南部藩により改修、
寛政十一年（1799） 江戸幕府蝦夷地を直轄する。	
寛政十一年・十二年（1799-1800）年 釧路～仙鳳趾 9里余	難所を開削して馬を通すようになる。その後、順次厚岸・根室へと開削されていく ⁷⁾
享和三年（1803）～文化三年（1806） 礼文華山道 4里	津軽藩が4里、道幅三尺に整備。
享和三年（1803）には、陸路の合計は、函館から234里となる。 ⁵⁾	
文化五年（1808） 仙鳳趾～厚岸 5里半	厚岸在住の丹波金助の調査踏査、アイヌを使役
文化四年（1812） 木古内山道 約8里	文化年間に改修 ⁵⁾
文化年間 千歳越 美々～千歳川 32里 美々～漁太 6里	北海道東西海岸を連絡する重要路線。
文化五年（1813） 雨竜越 留萌ヌプシャ～オシラリカ 25里	留萌場所の山田文右衛門がアイヌを使役し開削。
文化四～七年（1807～1810） 網走越 遮路～舌辛太～阿寒湖西岸～ 網走ニクリバケ 46里	白糠在勤の官吏大塚惣太郎が開削
文化年間 斜里越 標津～斜里 37里	アイヌの道を文化年間に改修
文化六年（1809） 余市山道 岩内～余市 12里20町	岩内場所請負人菊池新左衛門、古宇場所請負人福島屋新左衛門、余市場所請負人柏屋喜兵衛が幕府の意を体し、番人1人アイヌ24人を出し開削、安政三年改修、
文政四年（1821） 江戸幕府蝦夷地を松前藩に復領する。	
安政二年（1855） 江戸幕府蝦夷地を再直轄	
安政三年（1856） 黒松内山道 長万部～歌棄 11里	函館奉行堀利熙の上申により、長万部～黒松内間は、函館の福次郎、千代田村名主才太郎の出願、勇払場所請負人山田文右衛門の支配人金兵衛が出資、黒松内歌棄間は歌棄場所請負人樹屋栄五郎の父定右衛門出願し、私費により開削。 ⁸⁾

表1. 蝦夷地（北海道）における山道開削年表（2／2）

北海道道路史⁴⁾ 新北海道史第二巻通説⁵⁾より引用し、他の情報を追加し作成した。

開削年（西暦） 名称・位置・距離	備考
安政三年（1856） 藤山～軍川	
安政三年（1856） 雷電 3里	
安政三年（1856） 余市～小樽	安政四年、熊碓～錢函字ウタスツ 2里半は小樽請負人、恵比須屋半兵衛により開削
安政四年（1857） 濃屋山道 2里24町	厚田請負人、浜屋興三右衛門により開削
安政四年（1857） 雄冬山道 浜益～増毛 9里余	浜益、増毛両場所請負人伊達林右衛門開削
安政四年（1857） 錢函～千歳	
安政四年（1857） 太田山道 熊石閨内～久遠～太櫓ラルイシ 12里	久遠場所 江差の鈴鹿甚左衛門、津軽の長坂右衛門が私費により開削
狩場山道 須築～コタニシ	瀬棚～島牧間 江差の鈴鹿甚左衛門、津軽の長坂右衛門が私費により開削
安政五年（1858） 鶴越（大野越） 厚沢部～大野市の渡 11里	
万延元年（1860） 厚岸～根室厚岸～昆布森 ～風蓮湖畔厚別 9里10町	

IV. 猿留山道の記録（文書を主に）

①寛政十一年～十二年（1799～1800）
「休明光記二巻」¹²⁾ 羽太庄左衛門正養

大河内政壽はシヤマニに到着し、新道を開き、部下に中村小市郎、最上徳内が新道づくりを指揮する。そもそもこのところはチコシキル、トモチクシなどいうところがあり、蝦夷地第一の難所である。あるいは縄をさげ、はしごをかけて渡り、または巖の間をくぐり、あるいは波が打ち寄せる間を見て飛び越える所もある。ほとんどが人跡がまったくないほど難所である。しかし新道を開くには莫大な経費なので、私領（松前藩のこと）の力では無理なので、国家（幕府のこと）の力をもってこの難所を開き、蝦夷地第一の通路を得ることができた。その後、南部藩がなお整備し、今は車馬が通るのも思いのままである。村上常福、長坂高景は、シヤマニに止まり、越年して仕事

をする。長坂は翌年3月、村上は翌年9月に幕府に帰る。遠山景晋は、ホロイツミまで巡査する。

②寛政十一年（1799）¹³⁾

「蝦夷紀行」谷元旦
蝦夷地薬草調査の幕府の命を受けた渋江長伯に随行した画師の記録。

7月14日（旧暦：六月十二日）

セウヤより石の浜を通り、出崎に大きな石があり、ここは海の潮が満ちると通るのが難しい、石の手前、山の道は幸い潮が引いていたのでここを通り、第2の浜の出崎に大きな石があり、「ここよりウユンヘツという」…第3石門があり、第4は岩石がますます大きくなり、形がおもしろい…岩の角をよじ登って第5湾を越える、瀑布が2つあり、山の崖は絶壁で、第6は大きな岩石が海中にそそり立ち、第7の立ち石も同じようにそそり

立ち、その間の石の皺を道としている。第 8、大きな丸い石の中に洞があり、窓になっている。第 9 湾、瀑布がある。第 10 湾も瀑布がある。(略) 25 湾、先は平らな岩で海の中に大きな岩が2つあり、それから小さな先をまわってサルの旅館に到着。旅館の傍に山から落ちる清泉がある。この日1日中変わった形の岩、ならびに瀑布を見ることだけで、他に変わったこともなかった。

8月16日(旧暦:七月十六日)

ヒロウからサルまで浜道 23.6km、新道を切り開いた方は 19.6km 位である、(略) 山道は曲がりくねって上がっている。この辺に谷にかかっているつり橋 2~3ヶ所あり、そのなかの一つをラツチンという。山の道は最も高い所で、ヒロウからクスリまでの島を見渡し、アカンのヒンネシリ山を雲の間に見る…最も高い…ベンヘヘツの山中で昼食をとる、それよりシユムクンナイの坂を雲の間に見る、谷川に沿って下る所をヒタ・ヌンゲツクという。浜に出る道は、この谷川を7~8回過ぎて、ようやく浜辺に着くのは前と同じである。ヒタ、ヌンケのストフウを越えて右に岩山、左が海である、ランネットからホコラネットベツを過ぎサル、ベツの手前に新道の標柱があり、野道を 1400m 位行くと旅館に着く。この亭館は新道の方に新しく造った、家の前はサル、川が流れ、森林がある。野には大木にハギが多い、林の中にはキハダ(黄柏)が多い。

8月18日(旧暦:七月十八日)

サル、からシヤワヤまで浜道 11.8km 位、山道 15.7km。旅館を出て林の中を抜けて行く、坂を下りサルヘツを歩いて渡る、川幅が広く石の川で、両岸は大きな石が多い、風景はとても良く、そこから川の端の林の中を通り、また川を越えて、又林に入る。

ここで川は弓の形になり、支流を越え、野原を過ぎて、又川を越え、谷川に沿って山上へ上がり、谷川を三回越えて、山道につながる高山を越えて、山が続きトウノホリという山に着く、トウノホリ山はとても高く、道はまた曲がりくねり険しい、山間に沼があり、沼の周囲は高い山が囲み、水の色は藍を染めたようである。形は細長く四角形の大きな沼である。少し山を下ると所々にゴヨウマツの大木があり、また焼山に登る、この焼山も相当高い山である、しばらくして山上に着く、汗も服も乾いているが水がない、泉がない、幸いにアイヌの子どもが樽を背負って登っていたので、水かと尋ねると、水だと言う。お金を与え、ようやく玉露のような水を各々が飲んで勢を得て、山を

下った。道ははるかに海岸のまわりを望む平地のように、山にそって上がり下がり 3.9km 位、その間約高い山を 11.8km を過ぎて初めて岩の間を清水が出ていて、少しは湯きをなおして小道を下る。ここにシャツハイホリという谷川があり、石の川で水が清く、シャツハツヘツという、この辺の谷にはすべてサル蟹(ザリガニ)がいる、少しの時間に 100 匹位獲る。また山を登り 270m 位でくぬぎの原に着く、林を過ぎて、枝道があり、ここをホレンリコムヒシャウヤヤの岐路が二筋ある。ここで昼食。

右之道を行き谷を下りると石門がある、ここもまたヲクリカンキクが多く、また 109m 位行き橋を渡り、少しシャウヤより先へ出るため、道の傍にある野原を分け入って、川に沿って行き、左の方にまた石の川が合流する川中の石を伝って、丸木橋を渡る。…野狐(キタキツネ)を水辺に見る…人を見て驚いて山に入る…両岸の山は砂土の山で、土の中には丸石が多く、川に沿って下り、新道を切り開いている小屋がある…水春(水臼)があり…それから樹林の中を過ぎて浜に出てシャウヤに着く。この川をシトマベツという、水の中の石には雲母を含むものが多い。

七月十九日晴れ、ショウヤからホロイツミまで山道、旅館を出て、シトマンベツを渡り、山道を越え、往路を左に見て、林の中を 3.9km 位行き、アツフチイヘツの石間を渡る。

山道が開通していても、風ていれば海岸線を通ることもあったことがわかる。

猿留山道から豊似湖が見えること、新道開削の小屋、庶野へつながる道があることが記載されている。

③寛政十二年(1800)

伊能忠敬 「蝦夷干役志」¹⁴⁾

猿留山道開削直後の日記。

往路：7月4日(旧暦) 猿留山道通過
(新暦 8月 23 日)

復路：8月22日(旧暦) 猿留山道通過
(新暦 10月 10 日)

猿留山道開削直後の寛政十二年、蝦夷地測量時の記録。伊能忠敬は東蝦夷地の釧路根室、国後択捉への旅程を急いだためか、歌別川河口近くのコロップから猿留山道に入り、襟裳岬、百人浜、庶野、黄金道路沿い、目黒(猿留)までの海岸

線は歩いておらず、地図（図3）には「不測量」と記述している。

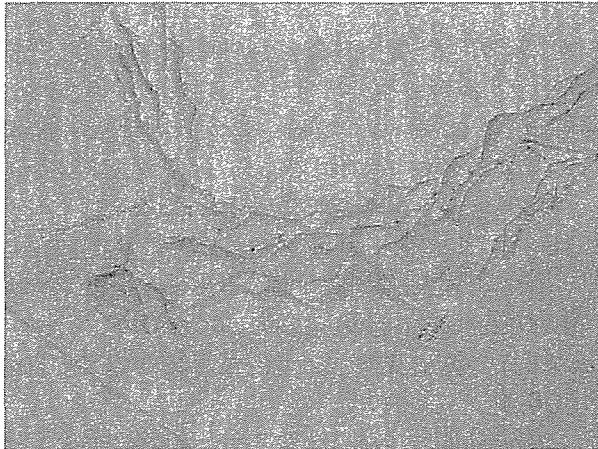


図3. 伊能忠敬（1800）国立公文書館蔵

1800年（寛政十二年）8月23日（旧暦七月四日）朝五ツ（8時）過ぎまで曇り、それより少し晴れ。夜曇り。夜半過ぎより雨。朝五ツ（8時）頃出発。海岸を1.9km行って新開山道（猿留山道）に入る。昼食所までは少し上下はあるが平地と同じ。それより山坂多く難所である。谷間のサルルへ26.5km、5時（七ツ半）過ぎに到着。定杭にはショウヤへ13.6km、ショウヤよりホロイツミへ18.7km。

1800年（寛政十二年）年10月10日（旧暦八月二十二日）、朝曇り、それから少し晴れ、夜曇り。朝六ツ半（6時）サルル出発。アツヒで昼食。道程は26.5km、5時（七ツ半）ホロイツミに到着。借家に宿泊。

④享和元年（1801）

福居芳麿「蝦夷の島踏」¹⁵⁾

箱館奉行羽太正養とともに太平洋を国後島に渡り、エトロフ島の巡検を試みたが渡航できず、帰路についた従者福居芳麿の記録。

6月17日（旧暦：五月七日）七日の夜明け前に起きると小雨が降っていた。この旅路はすべて浜沿いの道を行けば、雨が降る日は風もあって歩くのが苦しいので、雨の日はどこでも留まるべきなので、早起きしたけれど今日一日はここに留まろうと思うほどであったが、辰（8時）過ぎから雲がなくなり陽射しがさわやかに出てくるので、いざ出発しようとみんなは、ここの道も新しく山を切り平らにして、速い道となったので、大変狭くて悪いけれど山中の新道なので危険な坂道などはなく、昨日のほどの思いと比べようもない、アブラ

コマという所に和人が100人もいるなどと言われた。昔、高波によってこの辺のアイヌがいなくなつたと言われた。15.7km位でアブという所で昼食。ここからの道も同じように少し険しいところもあるがたいしたことではない。19.6km位でサルルという所に宿をとる。1日35.3km位の道である。ここアイヌに荷物を運ばせたので、酒を飲ませれば、大変喜んだので酔いひしれ、歌い踊りまわっていた。

新山道が狭いが近道と評価している。

⑤協和元年（1801）

「蝦夷道中記」¹⁶⁾ 磯谷則吉

8月1日（陰暦六月二十二日）卯半刻（朝7時ごろ）約500mで山に入りサルル川がある、渡船が2～3隻つないでおいてある、また渡してくれる人もいないので、自分で棹を20回使って渡った。約7.9kmも上ると、左の方に、東の海の浜、エリモ岬、百人浜（百人浜ということは寛文年間のころであろうか、シャムシャインというアイヌの長と津軽の金堀庄太夫というものを聟（むこ）として集団を作り、松前に近い蝦夷地オシヤマンベ辺までも和人を襲って来たが、このことが松前藩主に聞こえ南部津軽藩に命令され、松前藩とともにこれらを討ち負かして、責任者百人をこの浜において殺したことより百人浜と名づけたという。）を眼下に見下ろし、右の方を望めば、森林でおもしろい峰が幾重にも重なることもなく、また少しいくと500mの間に左右、見渡す限り秋萩が生え茂っている。

まもなく萩が咲き始めたなら、言葉もないほどきれいだろうと思われる。

秋萩の咲出む頃は行人の

袖の錦や色やそふらん

25.8km位の山道を登り下りしてホロイツミに着いた。

猿留川の上流を渡る際、船があり、竿で押し進めたことが分かる。

⑥文化五年（1808）

「蝦夷日記」¹⁷⁾ 児島紀成

10月3日（旧暦八月十四日）曇りの日で進まない。巳（10時）過ぎに、晴れるように見えたのでよいと思い出発した。とても高い山々の峰を伝

って行く道だ。谷底から湧き出る雲がただようのを見て

大空ははれ渡りけり山あひの
いさよふ雲はいづちゆくらん

阿渕で昼食をとり、母衣泉の役舎に宿る。

⑦文化五年（1808）

「仙台よりクナシリ迄往来日記道規細抄」
高屋養庵¹⁸⁾

仙台藩の医師の記録。帰路に猿留山道通過を通過している。サルル～山道～アツフツ昼所～ホロイヅミ

1808年10月11日

（文化五年八月二十二日）

サルル出発は萬病死なので、御人数よりは早くとりあつかいし、7時頃（明半時比）出発した。道程の半分（半道程）ほどにサルル川という川があり、幅13.6mほどで舟で渡る。ここから山道へ入り、段々と昇り、難所であり山頂まで20回も曲がり、急な坂で、もっとも石山である。登り詰めると、また下りの坂になり、右の方に大きな高山があり、アイヌにこれを問えば、カムイノボリという。本当に大きな高山である。段々と山の坂を下ってアツフツ昼所に着く。杭があり、これタヌキ沢とある。この昼所より真向に当るところにエリモの崎が見える。（図19. 参照）景色は大変よく見える。昼所の後ろは高山がそびえ、見得る。段々と行ってホロイヅミへ2時（八時）着く。

アツフツ昼所はアヒツ、アフツ、アフツ小休所、アブチ、アツトイ休所などと記され、昼食をとる場所であり、絵図がある（図10. 図18、図19.）が、遺構は確認できていない。

⑧文化六年（1809）

「東行漫筆」¹⁹⁾ 新井保恵

1809年5月29日（旧暦：文化六年四月十六日）快晴

1. 今日の新山道、最初は猿幕府によって出来、難しい仕事の二度目は南部藩にて出来た。
1. 当初からサルン（サルル）までの新道、徳内、小市郎が作ったのは寛政十一年（1799）である。その前は、海岸エリモ岬の前

から百人浜を通り、サルンで泊る。31.4km位であった。

5月30日（旧暦：四月十七日）快晴

ホロイヅミ会所より、

1. エリモ出崎へ11.8kmほど、エリモというのは、アイヌ語でネズミのことという。出崎にネズミの形をした岩があるので名がついたという。ホロイヅミ出発。海岸をおおよそ半分位行ってここから新道（猿留山道）に入る。山道3.9kmあまり、ホロイヅミより7.2kmほどで、ここまで道が良い、小休所が仮に建ててある。

テホルヘツ

これから山に入る。登り下りし大きな坂が二つある。たいして急でない。6km位でホロイヅミより14kmほどで昼休所アブチ、この昼休所は羽目板屋根で、内側は腰掛けのように作ってある。上の部屋3.6m×7.3m次の部屋が3.6m×7.3mほどである。

1. ここからエリモの先が良く見える。昼休所より正面見渡し、しかも午（南）の七～八分に当る。ここは山中の休所で海岸まで山が14～15もある。

1. ここにはアイヌの住居はない。

この山道の間にシヨウヤへ行く分かれ道がありおおよそ3.9kmほど。これより11.8kmほどが山道である。ここは登りで石が多く急で危険である。登りつめて左に沢があり下るのは大変遠く感じる。下りつめて小川がある。サルン川の枝川シヨチケウトルマという。この川に沿って少し行くとヨシすだれの小休所がサルン川の縁に仮に建っている。ここからサルン川を船で渡るが、徒歩で引く。川下は浜まで3.9km。おそらく川の源流は30kmもある。この川の通りにアイヌの家はない。

1. ここからサルン番屋へ2.9kmあまり。

（略）

1. エリモ崎からエサンへ西に294.5km。アツケシ大黒島へも294.5kmという。サルン川の小休所から少し先に一里塚。ここからサルン番屋まで2.9km。この間に川2本、板橋がかかっている。平地である。この人馬はホロイヅミよりヒロウまで通し、人足10人馬7頭にて来る。牛袋持ち場所の中のホロイヅミ番屋、宿泊、サルン、通常は番人が1人いる。ホロイヅミよりアイヌ1人が年を越している、清兵衛。ここにはアイヌの家はない。産物はない。山中で沢あいで、旅宿所のみの番屋が建ててある。

（略）

一. ここには五六六年南部藩の家人が数人詰めていた、公文書などの取り継ぎをしていた。当時 1.2m 四方の粗い板倉を造ったものがある。その後、会所が開かれたので、南部藩の人には引き上げた。

一. 今日、ホロイツミよりこの宿泊地まで通訳 1 人、帳役 1 人が案内に来る。支配人がいうには、一昨日、仕入れの船が入り、荷物を揚げたという。

一. (略) この入口に標識の杭がある。左、ここから志やうや(庶野)へ 13.6km、保ろいつミ(幌泉)へ 24.1km、新しい山道 北ヘヒロウへ 22.5km、新道係 最上徳内、小林卯十郎、寛政十一年未年八月(1799 年、9 月)と認められる。

小休所はアフツ以外にも、テホルヘツと猿留川の縁にあった。

⑨文政十一年 (1821 年)

「日鑑記」²⁰⁾

蝦夷三官寺(様似等樹院、伊達善光寺、厚岸国泰寺)の厚岸国泰寺へ赴任する住職の記録

1829 年 1 月 25 日(旧暦: 十二月廿日)

一 朝 9 時(辰之下刻)頃ホロイツミ会所を駕籠で出発。ラシラベツで昼食休憩、沼見峠にさしかかり、ここは東蝦夷地第一番の大難所である。そこからビタタヌンケ小休所になり、夜に入り排灯(明かり)を用意し、そこからラシラベツを渡り、そこからビボロ川を渡り、それからビロウ川渡り、しばらくして戌之刻(夜 8 時)頃サルル番屋に到着し、宿泊。

地名の並びが現在と異なっているが、冬期間も通行したことが分かる。

⑩ 弘化二年 (1845)

「蝦夷日誌」²¹⁾ 松浦武四郎

(略)

さて、これから山道、南岸は高い樹木が生い茂り、岩角が逆さまになっているような難所である、しばらく行ってケレフシ、しばらく行ってシロンナイ、少し峠を越えて沼があり、これをカムイトウという、ここに小休所あり、アイヌこの沼に神靈(カムイ)がいるという、よって見てはいけないという。まわって約一里半(5.9km)、四方は山が高く、青葉が茂り薄暗くもの寂しいところである、越えて、しば

らく行って下る。ヲタベツ川があり、歩いて渡り、ここから下り坂になり、東の海辺の方へ下だり約 5.9km、沢伝いに下りてアフチに着く、ここは海岸から少し上である。小休所がある、昼食をここで食べる、番人とアイヌ人が出張してお茶を入れてくれる。すべてこの峠内をトウブチ峠というなり。

蝦夷地行程記

一 会所元から	シラリヲマナイ	565m
一 シラリヲマナイから	ニケフレ	367m
一 ニケフレから	シュンケシナイ	500m
一 シュンケシナから	ホンモヨロ	218m
一 ホンモヨロから	ユルフル	545m
ここから陸路を行く道を示す		
一 コルフルから	ケレフシ	1200m
一 ケレフシから	モセウシナイ	1526m
一 モセウシナイから	ヲタヘツ	2398m
一 オタヘツから	アフチ	5.9km

さてまたアフチよりサルルへ陸の道は三里(約 11.8km)である。簡単に書くと、この道は文化(1804~1818 年)前は多くの人が通行したけれども、文化年間は通る者がなかったという。野道を上って半里(約 2.0km)でシトマベツ、小川があり、歩いて渡る。越してまた野道を約一里程(約 3.9km)で、トヨニ、ここは峠である。上に湖一つある。この川は流れて海岸の所々に落ちる。一里(約 3.9km)下ってサルル川、川幅は十五間(約 27 尺)、アイヌの小屋があったと聞く。しかし、今は無い。しばらくいってシャテクサル、そしてすぐノホリサル、小さな川がある。越してまた少し下り、番屋元に着く。しかし、この道は聞いたそのままを記録した。間違いがあっても許していただきたい

蝦夷行程記

一、アフチから	シトマベツへ	1962m
一、シトマベツから	トヨニへ	3927m
一、トヨニから	サル・川へ	3927m
一、サル・川から	シャテクサル・へ	2616m
一、シャテクサル・から	ノホリサル・へ	109m
一、ノホリサル・から	サル・へ	1199m
等である		

⑪嘉永七年 (1854)

「蝦夷紀行」²²⁾ 忠蔵(尾張屋番屋)

嘉永七年三月日米親和条約を締結、開国を余儀なくされた幕府は、ロシア対策にも追われ、目付・堀利熙、村垣範正を

首班とする大規模な調査隊を樺太まで派遣した。村垣の従者として随行した尾張屋番頭の日記。

1854年9月7日(旧暦:嘉永七年閏七月十五日) 夕方天気、5km、サルル、福嶋屋嘉七の持ち場所、番屋に泊る。預り人は小三郎。合計23.6km。間口27m、奥行10.9m、土蔵1ヶ所、物置小屋が多い、ここは通行の時に使い、漁はない、ここからまた山道(猿留山道)は難所である。サルルより

9月8日(嘉永七年閏七月十六日)曇、4.6kmでカルスコタン、腰掛け番屋で小休憩。ここサルル川は川幅27mで歩いて渡る。小川があり合計二つの瀬があり、マスの漁がたくさんある。ここから沼見峠へ登り、3.9km位あり、坂に休息所が2ヶ所あり、極めて大変難渉な山道で、峠の峰から、周囲500mほどの池があり、水は本当に清い。この池へ昔義経公が入水した人々は言い伝えている。この池へ石を打込むと、突然に水面が大荒れになるという。ここにはシカがたくさんいるので鉄砲を二度撃ったが、すぐに随分登り、闇夜のようになり2m先もしっかりと見えない、本当に悪い峠である。二三人で通るときは昼間でも化け物や妖怪などにしばしば出会うという。カルスコタンより3.9km。トヨニ、野立御休所、ここは峠を登りつめた峰である。この辺シカがおびただしく住んでいる。山の坂は難所の道である。同所(カルスコタン)より4km。アブチ、腰掛け番屋があり休憩。この山の出岬のエレモンの岬という所が7.9km位突き出ているという所に昆布小屋があるという。アブチより5.2kmでヲタベツ、野立御休所、この間に小川が3つあり歩いて渡る、マスの漁が少しある。ヲタベツより、3.9km、モセウスナ井、腰掛け番屋があり休憩、ここはアイヌの家が十軒ありマスが獲れる。ここから100mほど山を行って下って海岸通り、

カルスコタンとモセウスナ井に腰掛け番屋(小休所)、があったことがわかる。沼見峠にも野立御休所があった。

⑫安政三年(1856)

「竹四郎廻浦日記」²³⁾ 松浦武四郎

卷の二十七

1856年10月25日(旧暦:安政3年9月27日)出立
<十勝と幌泉の境の休所>を出発し、海岸の

岬2ヶ所を越えて右の方へ約200m入ると
ヲヒタルシベ 岩サキ
ヲンネト
サル、

番屋に着く、さてこの番屋は幌泉の場所であるが、えりも岬当所までの昆布を十勝より採りに来ているために、当時この番屋の宿取扱いは十勝が管理していた。よって、十勝番人が来て世話をしていた。

さて、この地名サルルはサルルンである。これは玄裳道士のアイヌ語で、その話によると、ここはツルが多いところである。その土地肥沃にして前に川がある。ここから左、海岸通りを行くときはチフヤンサルルサキ等を越えてえりも岬の方へ出る。

しかし、冬は山中は雪にて道通れないとき、今もその海岸を通る。詳細は三航日誌に書きここでは略す。(字欠)通行屋一棟(109坪)、板・蔵一、雇いアイヌ小屋一棟あり、昔はここにアイヌ小屋五軒あったが、今は一軒もない。前に標柱(十勝より約23km、幌泉より約26km)がある。この辺はシカ多く、今日も浜でアイヌたちが一頭を捕ってきた。夜中に鳴き声を聴き、はるか遠い故郷に思いをはした。この前の川は浅瀬で小石少しあり。しばらく上に登ると三瀬斗につく。その源は様似領で幌満とその上の山の後ろから来る。

10月26日(旧暦:安政3年9月28日)出立。
川岸に沿ってしばらく登る

ヲン子ナイ
ノフルサルル 歩いて渡り 川あり
サツテクサルル 歩いて渡る
サルルヘツ

この辺はカエデが多い。その他、カシワ、カツラ等も紅葉になってきた。川があり、幅約28m、小石川で急流、水かさが増している。時には舟で渡る。この川は三つの川が合わせて猿留川となる。いずれもマス、イワナ、雑魚がいるという。越えて小休所一棟(6坪)ここから坂道で難所である。

カルシコタン

ここの小休所の後ろの辺をいう。地名カルシはきのこ。コタンは所である。近年まで南部人が来て椎茸を作っていたので名づけたという。これからいよいよ険しくなる。

トヨイ

険しい山をしばらく歩いて(約6km)南に山が険しくそびえている間に一つの沼があり、これをトヨニトウという。深い沼である。その上の小道から見るととても美しく見える。

この上の山を豊似岳という。神靈がいて昔、湖の山にアイヌガシカを追った時には、激しく甚だしく雨が降り、よって早々に帰ってきたという。少々行き岬あり、トウブチ岬また沼見岬ともいう。前後の眺めがいい。ここから山の中腹を南へまわり、左にえりも岬等を望む、少し行くと

ハンケシトマヘツ

シトマヘツ

ヘンケシトマヘツ

三ヶ所とも谷川、地名シトマヘツは風雪厳しく歩きにくいところ。少し行って

アフチ

ここから百人浜を眺めるのに良い。昼休所一棟(17.5坪)。この辺水がなくシトマベツから運ぶ。地名アフチはアンツの訛り言葉である。古くは、この辺の山々にオヒョウが多くあり、皆アツシを織るのに皮をはぎに来ることから名づけられたという。

オタヘツ 小川

モセウシナイ 草刈沢

歩いて渡る。この辺は平地でカシワが多い。地名は草刈沢ということ。小休所(12坪)一棟あり。ここまで下役の秋山氏が出迎える。その後ろにアイヌの小屋七軒(トキクンテ家族四人、アシンテキ(家族五人、シヲネロ家族四人、シエリムシ家族二人、アハマカ家族七人、チャラシケ家族三人、シエリヤ家族四人)あり。ここには、昔、何もなかった。50~60年前始めてアイヌ村となつた。そのころは十軒余りあったが今は七軒になつた。そのうちトキクンテの爺脇乙名は当年87才になつた。また並んで

ケレフシ

モセウシナイと同様のところである。昔からここに七軒あったが、今は三軒(アマノ家族二人、イヘクニ家族二人、ユウコライ家族2人)があり。2軒は相続人なく、1軒(イヘクニのせがれエヘリノ)はまだ妻がいないと聞く。ずっと下って

ユルフル

ホンモロヨ

ここは砂道。上に昆布小屋がある。そばに近年アイヌの家が3軒あったとか。今、2軒(乙名インカラアイノ家族4人、惣小使リクナン家族7人)は会所へ引越しした。1軒は出稼ぎに行っているが当所に残っている。この辺、この間の砂原岳噴火で焼けた小石が海岸に多く寄った(浜は西向き:酉向)。

シユンケシナイ

ニケフシ

ここも近年まで3軒ほどあったが今はない。

シラリヲマナイ

ホロイツミ

地名ホロイツミはホロエンルンの転語(ある語から変じて出来た語)である。ホロエルンは大岬と訳す。ここは、左右が岬になっていて一つの湾になっている。西(酉)に向いていて小さな澗がある。

⑫安政四年 (1857)

「東微私筆」²⁴⁾ 成石修

安政二年(1855)、函館などを開港する日露和親条約が結ばれていたが、日本周辺には外国船が出没し、国内は騒然としていた。特に北辺の蝦夷地の実情把握のため、幕閣地自身がその家臣を蝦夷地に派遣した。老中久世広周(下総国関宿藩主)は、成石修を蝦夷地巡察に派遣した。

9月14日(旧暦七月二十六日)11月(旧暦九月)中頃の気候である。ここよりエリモ岬を廻る海岸の道があるけれども、通行は山道(サルル山道)を行って26.8kmでホロイツミに至る。この道サルル越えでもすこぶる危険である。番家を出てすぐ山道である。3.9km サルル川に沿って山道を上下し、2.2km 程行くとヨン子ナイ川があり川幅11m 位を越えて、行くとノホリサル川があり川幅28m 位、この辺は平地で密林である。サルル川は川幅拾 31.8m 位で急流で深く、水が馬の腹にとどく、カルシコタン休所がある。これより山中の小道で渓流の中を、山を踏み越え、水を渡り、曲がりくねった道をよじ登り危険である。2.8km 位も登ったところに四方に山がそびえたち、下に一つの碧沼がある。昔、間宮氏が測量したがその深さはわからなかったという。山腹の小道は足下は数百丈の深い谷であり、左に碧潭蒼々深い淵なので、恐ろしく感じだ。トヨニの嶺は高く、この辺から東の方の山々が連立し白い雲がわいてきて非常に珍しい。これよりシトマベツ川で川幅は13.6m、トマヘツを経てアフチ休所があり昼食にする。ここよりエリモ岬の方向は連山が眼下に見えて東大洋は蒼々として眺望はとても珍しい。山道を下り3.9km ヲタベツ、川が三つある。少し行くとケ子フシ、ここより海岸 3.3km でホロイツミに至る。

記述から、危険な印象が強かつたことがうかがえる。

⑭安政四年（1857）

「罕有日記」²⁵⁾ 森一馬

「罕」まれにある。論語「子罕言利」（子まれに利をいう）からとっている。越後長丘藩主牧野忠雅が老中職にあつたとき、蝦夷地・北蝦夷地の調査に派遣した長岡藩士の日記。（図8. 参照）

1857年10月7日(旧暦八月二十日)快晴
宿泊地はホロイツミ 29.4km

サルル

7時過ぎ(五ツ時過)出発。番屋から直ぐに草や樹林の中を行き 160m 位にてサルル(一里標ヒタヌンケより 5.8km、ホロイツミへ 29.4km)川を左にみて 500m 位行くとようやく茂った林の中を登る。小川を越え、また坂道を登り降りしてチノナイ川(幅は 18m ほど)石のある川で清流である。渡って山中は平坦で雑木の中 500m 位にてノホリサル、川(幅は 36m 位)石のある川で、急流なのは前の川と同じ。渡ってなお山林や小川があり、越えて平坦な山なみと樹林の間をいくと、一段と低い所に下りて樹木はいよいよ増えて鬱蒼としている。日光も届かず 500m 位で(サルより 3.9km)また数百メートル(数丁)行くとサクテクサルル川(幅 10m 位)200m ほどでサルル川(幅 36m 位)石のある川で急流である。これらの川は下流で一つになり、サルルの南で海に入るという。越えて前と同じように茂った林の中を川に沿って上がり、330m 位で川近くへ下り、石の道 500m 位で川と距離をおき、また一つの小さな流れを越えて小さな坂を登ってカルシコタン小休所がある。タバコ・茶で休憩する。ここから森林で狭く急な坂道を次第に登って稜線に出る。曲がりくねった道が 2000m で険しく危険である。アツケシ(厚岸)国泰寺使僧に出会い、道が狭いのでお互いに通りすぎるのが難しく、少し広いところを選んで馬を止めると、僧侶がわざわざ馬を後ろに戻してくれた。馬を導く者が来て挨拶をしなくてよいので通り下さいというが、私は馬から下りて丁寧に挨拶した。しかたなく馬を下りたのに丁寧なお礼を述べられ、別れを告げてまた馬に乗る。この辺は狭い道で、馬の足元は深い急な谷底で馬の乗り降りはもっとも難しい。また 800m 位を上り右側に広い沢があり、一つの湖が見える(縦横 500m 位)青い水は湛々(たんたん)として、一点のよごれもない。昔、最上徳内が繩を降ろして測ると深さ二百余尋<360m>あったという。また魚はないという。この辺より稜線上や左右の山には木立はなく芝草が生えているだけで、すべ

て岩山に見える。また数百メートル登るとトヨニ(一里標サルル川一里)ここから登ることまた1km 位で景色は絶頂である。右はとても高い山、左はなだらかな山で、どれも高い山であるが樹木はない。左斜めに下り、遠くを望めば青々とした雲が長くたなびき、眼下には渓流と山が重なり波が打ち寄せるようだ。絶景に心酔し自然に轡をとめた。ここから下り 1600m 位また森林の中である。仙台藩横尾金右衛門氏と行き会う。私から人馬の引き換えを希望し、お互に馬を降りて林の中で挨拶した。これからクナシリ崎まわり見てシラオイに帰るという(この人、目付役なので上下五~六人を連れている。)以前に奥の青森に逗留したとき、そこに到着するのをみると、若党中間が十四~五人でもっとも厳重に護衛している人であった。当時シラヲイの本陣に所属していた。人馬の準備ができお互に出発の挨拶を伝え南北に分かれた。ここから大きな樹木の間を下り、渓流を数本越え、また急な坂 600m 位登り、平らな山の上に出てシトマレツ(一里標トヨニより)この前の林を下り上ること数回 2200m で細い川を渡り、アフチ昼夜休所があり昼食をとる(サルルからのさし入れである)。ここは南にエリモ岬(エリモはネズミのことである、現在神を崇めて岬の上に小さな祠が建っているという)細長く大洋へ突き出している。巨大な岩が多くその出ている先から湾となりこの山の下に入っている 11.8km 位ある。また美しい景色である(この出ている岬は芝の山で木立がなく磯辺を百セン浜といわれている)。食後、平坦な山道を数百メートルでアブチ(一里標)また登り降りること二回、渓流を三本越え急な坂を登り、平坦な雑木林を次第に下り、坂を越して沢に入りヲタベツ川(幅 18m 位)標木がある(アブチより 3.9km)、越えて山間は平坦で広く、なお 2200m あまりでモセウシナイ(またケレヘツともいう)小休所、アイヌの家が九軒あり 820m 位でケレヘツ(ヲタベツより 3.9km)前と同じ山道を 1.4km 下り磯辺に到る。海岸は平らな山が続き、この辺は昆布小屋が多い、小川を二本渡り 2km で山の出崎をまわりホロイツミ 会所に宿泊 5 時(七ツ半時)

〈略〉

一 今日は 26.8km の山道で急で危険であった。ヲタベツ辺りからなだらかな山道である。

一里標が設置され、狭いながらも馬に乗って旅をし、馬は引き継ぎしていたことが分かる。また、山道は急で危険であるとしている。

⑯安政四年五年（1857-58）

「東蝦夷日誌」²⁶⁾ 松浦武四郎

幌泉の名は前に述べたとおりで、ポロエンルンで、岬の名を当初の名前とした。ここは元は松前家の家老、蛎崎藏人の給地である。

(略)

ここから、東海岸のトワベツへの道があり、標柱が立つ。(2180m)ヲタベツ(川幅 9m)岸に岩躡躅(イワツツジ)が多く生えている。名の意味は砂の川である。源流は近い。ここから赤土の坂となり、樹林になる、道は険しい。木立をすぎれば、左にアブチ岳、右の方、エリモの方まで平野を一面に見渡し、実に天下の絶景である。

ながめやる あなたに國も 有ときく
こや毛もの喰 人ぞ住らむ

アブチ(昼休所 3.6m、10.8m)呑み水は遠方から持ってくると。山を背に建っている。名の意味は、アツウシの訛りである。これは榆(ニレ)が多いためである。雪の深い冬期間は、この山中を一日で越すことが出来ないので、その時の止宿のためにとして近藤重蔵・最上徳内が建て置いたという。同じく山の中腹を少々行き、谷を一つ越える。(この谷にはシトマベツへ流れ落ちる)弘化(1844~1848年)のはじめに通ったときは、この辺りに桟橋があったが、この度はそのような物は無い。この辺は岩が高く、とても難所である。眺望はなんとまあよい。シトマベツ(川幅二三間、急流也)名儀、シトマレベツにして恐敷と云義、此地冬分風雨強敷故に号く。是より谷川を又過。屈曲五ヶ所過、蝦夷松、五葉松等有山腹しばしして(一里)シトマヘツ(川幅 4.5m 急流である)名の意味は、シトマレヘツで恐ろしいということ。ここは冬の間、風雨が強いところから名づけられた。故、

ここから谷川を、また過ぎ、折れ曲がりを五ヶ所を過ぎ、蝦夷松、五葉松などがある山腹を、しばらく行き(3.9km)

きのふまで 雲か山かと 思ひしは
この峠の あたりなるらし

トヨニ峰、(左にトヨニ岳、右にトフチ岳)ここから東北の方を眺めると、山の向こうに、トウブイ(当縁)、ヲホツ内、クシリの方、阿寒の両岳、その他の小さな山は、はっきりわからないが遠望し。後ろを眺めると、アブツからヲタベツの原野が一望できる。眺望は、はたとえようがなく、左のトヨ

岳は、天を刺して直立している。

私はこの山を登ることを、弘化(1844~1848年)にここを通った時、計画したが、支配人なる者の話では、文化(1804~1817年)の頃、ある役人がこの岳に登られて、5~6分にして、晴天がたちまち暗くなり、この沼から雲が立ち上がり、大きな雷が大地を碎くように、雨が車軸を流し、その頂に行くことが出来ないまま下山された。その後、天保(1830~1844年)の頃のこと、松前藩の家臣が、この岳に登ろうとして、アイヌが断るのを強いて案内をさせて登ったのであるが、二・三合目にして、また空が乱れ曇り、盆を傾けたような大雨となり、自ら恐ろしくおののき上がることが出来なかった。その御方は三日を過ぎてお亡くなりになられたと聞く。

それなのでアイヌも大変恐れていると言われるまま、空しく思っていたが、2年前の辰年(安政3年、1856年)に、また、登山を計画し、一昨寅年(安政元年、1854年)に、堀使君(利熙)の家来が、登山の事命令されたので、止むを得ず案内者を出させたが、これまた本当に、大雷、大雨で登ることが出来なかった。よって、アイヌは、その山の靈がいるのが明白であると恐れて、案内を命じても逃げ去って、来る者がいなど答えるので、また、空しく時を過ごしたのは、滑稽である。

今年、安政五年(戌午、1858年)の7月下旬、サル^ハで、山村惣三郎という人と同宿し、この山の話をしたところ、惣三郎殿は安政三年(辰年、1856年)に、この山に登ろうと案内を幌泉で頼んだところ、前に私が断られたように同じ理由で断られ、今度も十勝でそのように断られたことを話してくれ、高い山ではこのような事があるかも知れないと、お互に話ししながら就寝した。翌朝、早く起き出し、イソラムク(サツナイ[十勝幸震]のアイヌ)、エレク(ビバイロのアイヌ)の兩人を呼んで、「私は昨晚不思議な夢を見た。八十余歳とも見える大老人(ホロチャチャ)が、白いアツシを着て弓矢を持ち、黄金の太刀を腰に差し、私の枕元に来て、余はトヨイ岳の神である。その方に一つの頼み事がある。それはほかでもない。昔は、トカチ・幌泉のアイヌらは日タイナウ(木幣)を作り手を合わせ、時々お酒を持って、わが山に持って上がって来て捧げてくれたが、次第に和人の習慣になれ、近頃は一切捧げてくれるアイヌ人はいない。その方は蝦夷の国、どこかの高山へも酒をあげ、イナウを持って上がり捧げたので、明日は必ずお酒とイナウを持って我に手向けてくれよ。そうすれば、来年はトカチ・幌泉は大漁になり、川上まで昔のようにサケが上る様に

する、また悪病も決して流行しないように守ると、ほんとうに雲に乗ってトヨイ岳の方へ飛んで行かれた。山の上には金色の光りかがやいていると。

それで、私は今日酒一升を持って行くと、亭主に一升の酒を用意してもらい、同宿の村山氏に時間をつくるのをたのみもせず、急いで出発し、9時(五ツ半)頃峠に着いた。馬をつなぎおいて、トヨニ岳の方へ登ること(50~60 歩で)、山はいよいよ険しく、近年一人のアイヌ人も上らないため道はなく、30~60cm にもなる岩薙〈イワスゲ〉が生え、その中を分け行くと、岩薙が生え、おおいにかぶさっているためにわからず、下には大岩が重なっているので、その間に足を入れ、また岩の上に乗ると、すべり岩の角に腰を打つなどして、その危ないことはとても大変であった。

ここを上ること1時間位(半時)で、ソウヤ〈庶野〉・幌泉な眼下に見下ろすようになる。また、一時間位で、山八合目と思う頃、カムイトウ〈豊似湖〉は、私の足下にある。一步誤れば湖中に転げ落ちてしまうと思われる。昼頃、山頂に上ると、割れた岩が折り重なって一つの山になり、その間から岩躑躅、五葉松の老木が岩を這い、樺の木も数十株が、曲がりくねり、風になびいて地をはようであり、その上に岩菅が生い茂っているが、岩の隙間からは岩の間から白蟻一面に這い出し、足の踏み場もない。考えは違わず1本のイナウもなく、両方のアイヌも近年はまったく上がっていない。考えると太古にアイヌたちはここに時々上がり、この石を積み上げ作ったので、この山の形が、すこし積み上げたように思える。ここから北北東(子丑)の方に、ヒロウ・ベルブネ〈歴舟〉・十勝の川筋が一面に見え、北西(亥戌)の方は、かなしいかな、シトマベツ岳にさえぎられて、それより遠くを眺めることは出来ず、西はエトモの方まで、南は、その果ても知らない大海原であれば、とりあえず口づきみ

ならびたつ いもせのあかん 中ならん
むねの煙の ひまもあらぬは

すべて、アフチ岳、トウフチ岳を眼下にして、まるで波濤のように如く見える。この山頂にイナウを捧げ、日本・蝦夷すべての国中の大小の天神地祇〈神祇〉、特に登与仁〈豊似〉大權現に、国家安全、風雨順時、五穀成就、大漁満足、道中安全、転んでも怪我をしないようにと神々に高らかに祈願し、下ろうとすると、尻にもしも支配人のいうように、大雷大雨に遭ったらと、用意の桐油を滲ませた布を敷き、上がるや否や富士の素走り〈砂走り〉と異なることなく、瞬時

に六合目あたりまでおりた。

ここで峠の方を眺めると、ほんのわずかであるが、ここにアリが通るように何かが目に留まり、次第に近づくのを見ると、人馬であり、これぞ山村氏であると語り合い、その人達の方を仰ぎ見て、私が下山するのを待って居てくれた。道すがら、今朝の夢物語からトヨニ岳の様子を語り、まったく今日、私は山に上ったので、気持よく無事参詣をして山を下りた。

かねてより 聞きしにまして 此山の
神のいさをは たうとくぞある

峠から。右手の山の中腹の狭い道を行き(左)カムイトウ(周囲 3.9km 位)という、その深さを知るものはなし。(昔から水際まで 360m)水色は藍く、山の懷にあるので、周囲が高いけれど、その水の増減はなく、また、流れる出口もない。これは久摺〈釧路〉領の摩周湖と同じである。また水面には1枚の落葉も浮かんでいない。実に不思議な湖である。よって神湖と名づけた。昔は、この峠を通行する者、湖の見える間は談話をも禁じたと語っている。云うことである。(2.7km)、すべて近年までは松、榎松などが生えていたそうであるが、今は大半が枯れて無くなっている。

これから山あいをしばらく下り、(1400m)ここは岩が高く、雨天の時は水が流れ、滝川を上るようなら(下り)カルシコタン(小休所)名の意味はシイタケの所というそうだ。昔、南部の人人が来てシイタケを作った所という。この辺、紅葉の盛んな頃通ったことがあるが、枝が多く折られていたので、

行ゆけど まだ道遠し 冬木こる
音かと思ひしは きつきの空

サルベツ(川幅 27m)転太石(ごろたいし)の川ですべて危ない。昔は小舟を置いてあり、通行人は自ら舟を操って渡ったが、次第に馬での通行が多くなり、後に舟も廃たれて無くなっている。名の意味はサル・ンで、昔、この山中にツルが多く生息していたので名づけられた。サル・ンはツルのことである。川筋には大木が多く、特にここには楓、榎、薺など秋に紅葉した時は、浅瀬を照らし、行き来する人の顔にも、映えて見事である。(平らな山 2600m)サッテクサル(川原)ここはサルの乾いた川の意である。(109m)ノホリサル(川幅 14m)橋がある。両川ともサル・川へ流れている。ある時、秋のなかば頃に、早くも樹々が十分に紅葉し、早や落葉する木々もある。すべてここの紅葉は一度に染まることなく、染

まるとすぐに散りはじめ、その眺めの間は、わずかの期間である。それで奥に住む乙名の2人の翁は、「紅葉しないで散らない木に葉がある限り」と、風土の実情を嘆かれたのも、そのことが分かっているということだ。『和人は働いたアイヌに、紅葉せず一冬枯れた葉がついているカシワの木の葉が落ちたら、賃金などを支払う等と約束し、賃金を支払わなかつたことがあったという』私も傍らの木に、一句を書き記し置いた。

ながめやる はての限りは 山守りよ
神いますとて 斧をゆるすな

川の両側は砂地で(番屋の向い)、サリベツ(左川)、ヌフリサル(右川)、ナンフケ(左川)ここはシイタケ取りが住んでいる所、ワウシ(渡し場)、カルシコタン(右川)、タンネナイ(右川)この水源は小川が数流あり、サケ、マス、鯰(アメマス)、桃花魚(アカハラ)、杜父魚(カジカ)などが多く、水は浅く冷たく、両岸には奇石怪岩が多い。また滝もあって、分け入ると、大変良き景勝地である。

越えて左の山のそばに架け橋などがあり、下がり樹木多い(1200m)サルの番屋元に到着。

アフツ小休所は、宿泊もできるよう建てられたことが記述されている。

次の⑯は⑮の文献と同様のことが記述されているが、異なる記述もあるので記載する。

⑯安政五年（1858）
「戊午東西蝦夷山川地理取調日誌」²⁷⁾
戊午第四十六卷東武南美咲志
松浦武四郎

戊午巡惠里茂日誌
松浦武四郎著

8月21日(旧暦:七月十三日)朝の涼しい間に秋山氏はここから馬に乗り、上の野原へ上がり、ここから山道(猿留山道)を通り、サルへ出られる。私はここから海岸をそのまま行く。さて、ここから山道は約3000mでシトマヘツの川縁に出て本道へつながり、そこから峠を過ぎてカルシコタンへ下り、サルへ下る。約11.8kmという。私も馬士に馬を連れさせて、直接サル番屋へ山道通りを行かせた。

戊午登武智志
松浦武四郎著

トウフチノホリはホロキツミの範囲である。サルル番屋を出て約9.8kmでトウフチ峠がある。これはトウフチ山から続いているのでこの名がある。

その峠は峰続きで北西に当たり、山が高く陥しくそびえたちひとつの稜線で、その名の意味カモイトウという周囲約3.9kmの深い沼がある。よってこの名があるという。トウフチとは沼の端という意味。昔からこの山に上ることを禁じているので、すべての人を上げなかった。そこで私は安政三年(1856:辰)にここの山に上ることを願ったが、案内する人が言うには「近年もここにお上りになろうとした人がいたが、山の中腹まで上ると、四方に黒い雲が舞い下がり大きい雷・大きな雹の雨が、車軸を流すように降り、一步も前に進めず帰ってこられた」と話を聞けば、いかにもその山の様子は普通ではないと思い、むなしく過ごして忘れるこの出来ない恨みと思っていたところ、今度こそと思っていた。

7月24日 サルル番屋で役人山村氏が、医師大内氏等と同じ宿に泊まり、私は一人、イソムラ、エクレの2人を招いて、足の早い馬を準備させ、この馬に乗って8時前(五ツ前)にトウブチに着く、峠へ来たら私はイソムラに「ここの山に神様がいて、昨夜私が寝たところ、白髪のアイヌが一人白衣を着て、突然現れ、夢のように、現実のように、私に語りかけた。私はトウフチ山の神である。

生まれつき酒が好きだが、この頃一滴の酒も私に持ってきてくれる人がいない。あなたが今日私の山に上って、1本のイナウ(木幣)を削って立て、それから下り、お酒を私に手向けて下さい、と言われた思ったら、夢はさめた。そこで今日は上ってイナウを1本立て、それから下って会所で酒を買って捧げると言い、「そこで貴方達が案内をするように」と尋ねたところ、案内のイソラムもエクレも神の教えという、みんな下りお酒を捧げるとそういう、そういうことなら私を案内してくれることを承諾した。それからここへ荷物を置き、山に上ると、その山は一面菅(スゲ)が生えすべり、その下は大きな岩が突き出ている。どうにも足を止めておけなかったので、なやんだ。約1900m行くと四方がよく見え、その景色はいいようがないものだ。また1090mも上がると、ただ岩石が露出していて、その間は樺の木が多い。また270m位過ぎて頂上に着く、大きい岩が重なっているところに、五葉松)が地にはって生えていて、そこからアリがた

くさんはい出していた。そのアリは大きく足のような羽があって飛び歩き、少しでも腰をかけて休む気にならなかった。つま先立ちして四方の景色を描き、イソムラにイナウを作らせて納め、山を無事に下った、本当に蝦夷地の開拓の一つの吉兆が起きる前兆だろうか。12時過ぎ(九ツ過)峠に下って、次々に進んで山村氏、大内氏も来ていて、私が降りてくるのを待っておられ、同行して午後4時過ぎ(七ツ過)にホロイツミ会所に着いた。

案内人二人と当所の乙名、並びに脇乙名四人へ酒二升を与えて「トカチ、ホロイツミの大漁、並びにマツラニシハの旅の安全のために」と祈っているも、本当にちょっと笑った後の話となってしまった。

V. 絵図等に残る記録

江戸時代に記録に残る資料は多くあり、ここではその一部を紹介した(図4~27.)。年代を記述していない図は、製作年不明である。

絵図から猿留山道の利用は盛んであり、小休所など必要な建築物も設置され、重要視されていたことがわかる。

VI. 猿留山道の再発見と現状

えりも町郷土資料館では、町民有志の協力を得て、使われなくなった猿留山道の調査を平成9年(1997)より開始した。地元住民から聞き込み調査し、遞送の仕事を請け負っていた工藤勇氏(故人)より、おおよそのルート聞き、現地調査を行った。その結果、「七曲り」「大沢」「重蔵林道」などの名称の位置を確認でき、チシマザサ(ねまがり)に覆われた山道跡を確認した。しかしながら、江戸時代の古文書に記載される豊似湖(カムイトウ)や沼見峠などを通過せず、明治時代に開削された新山道であると判断した。この新山道の大部分は現在庶野一目黒間の広域林道となっているが、所々に新山道跡を確認することができる。

平成10年には、本格的な調査を実施し、江戸時代寛政十一年(1799)に開削された猿留山道跡を発見。豊似湖を見下ろす沼見峠に江戸時代建立の石碑2体「妙見神<安政六(1859)>」「馬頭歓世音菩薩<文久元年(1961)>」を確認した。その後、

平成15年までの5年間をかけ、猿留山道の痕跡を調査し、ルートを確定することができた。(図1.)

猿留山道はチシマザサに覆われていたが比較的原形が保たれ、法面や石積を確認することができた(図28~37.)。この要因の一つとして、猿留山道が北海道有林内に位置し、昭和40年代中頃まで林務署(現在北海道森林室)により森林管理道路として下草刈りが実施されていた(我孫子貢氏、私信)ため、近年まで原形をとどめていたと考えられる。

開削された当時は7里半(約30km)といわれた猿留山道の一部は、現在、国道336号線、林道、町道になり、また、造林作業道などに切られ原形をとどめていない区間、トドマツの人工林の中を通過している区間もあるが、約9kmが江戸時代の情景のまま残存している(図1.)。

VII. 猿留山道の保存活用について

えりも町教育委員会では、猿留山道の歴史的価値を明らかにし、保存と活用を進めるため、シンポジウム、歩く会、ボランティア事業を実施してきた。

平成12年「日高の山道シンポジウム」をえりも町・様似町・日高支庁などが共催し、猿留山道、様似山道を歩くイベントには100名以上が参加した。

平成14年からは、えりも町内の小学生を対象とした自然体験事業、町内小学校の遠足、新任教員研修に活用されている。

平成15年(2003)から「猿留山道復元ボランティア」事業を、北海道日高支庁(現日高振興局)、日高教育局、えりも町商工会、えりも観光協会、えりも町教育委員会、えりも町郷土資料館N42°の会などで実行委員会を組織し実施した。

この事業は、歴史的にも貴重な猿留山道について学び、参加者で下草刈り(ササ刈り)作業に汗を流し、猿留山道の保存と活用に一致団結して取り組む内容であり、平成24年(2012)まで継続して実施されている。これらの活動から猿留山道の歩行は比較的容易となっている。

猿留山道は、平成21年(2009)4月1日、「猿留山道と江戸時代の石碑2体」としてえりも町文化財に指定され、保護と活用に取り組まれている。



図4. 蝦夷地ホロイツミ場所(一ノ瀬朝春)
(函館市中央図書館蔵)

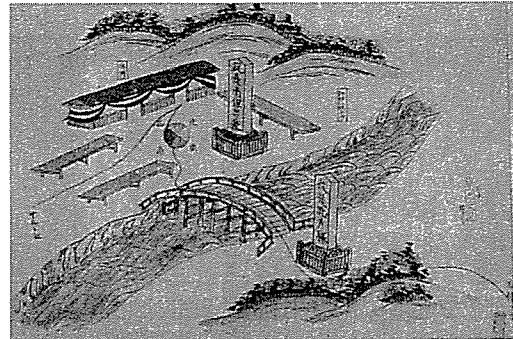


図8. 東蝦夷地より国後へ陸地道中絵図
(楢山隆福)ビタタヌンケ(函館市中央図書館蔵)



図5. 蝦夷地ホロイツミ場所
(函館市中央図書館蔵)

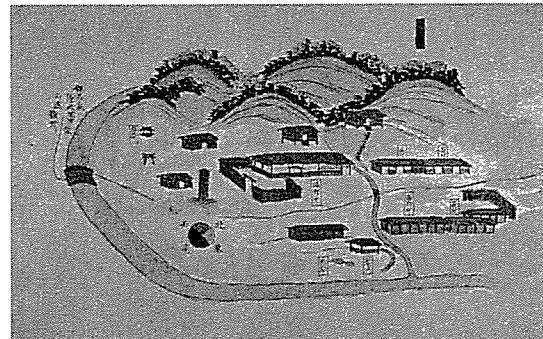


図9. 東蝦夷地より国後へ陸地道中絵図
(楢山隆福)サルル通行屋(函館市中央図書館蔵)



図6. 罕有日記(1857)(森一馬)(函館市中央図書館蔵)

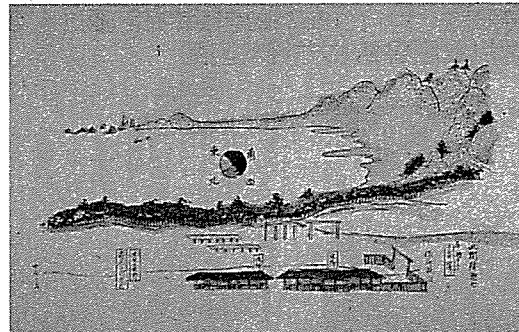


図10. 東蝦夷地より国後へ陸地道中絵図
(函館市中央図書館蔵) (楢原隆福)アフチ小休所
[襟裳岬・百人浜眺望]

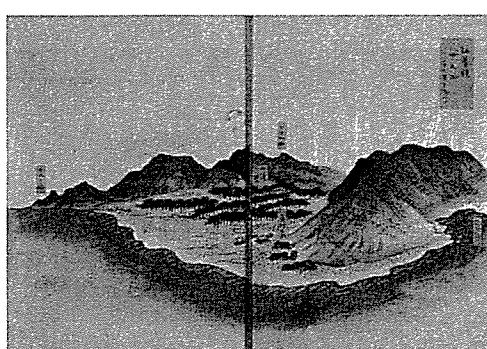


図7. 延徐歴検真図(仙台領サルル)
(函館市中央図書館蔵)

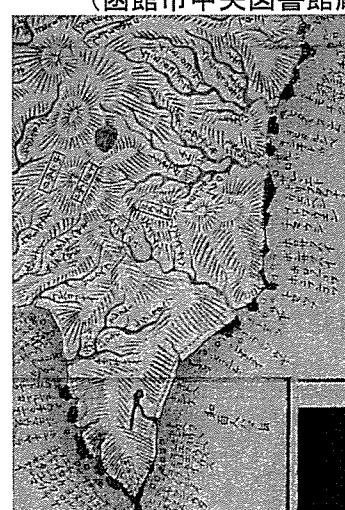


図11. 「東西蝦夷山川地理取調図(七)」(1854)
松浦武四郎(北海道大学附属図書館北方資料室蔵)

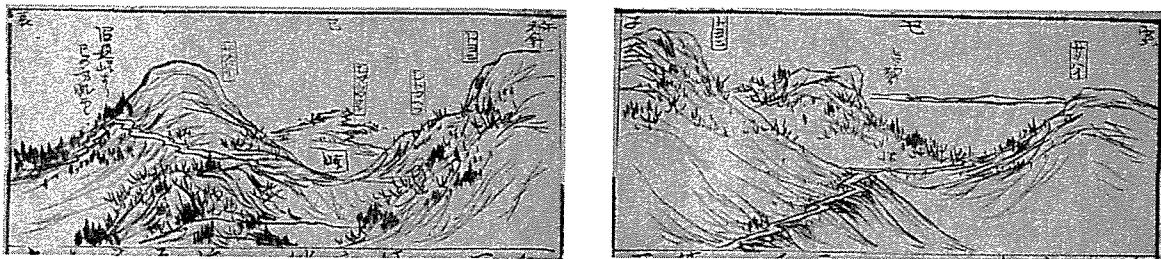


図12.「廻浦日記廿七」(1856)松浦武四郎(北海道大学附属図書館北方資料室蔵)

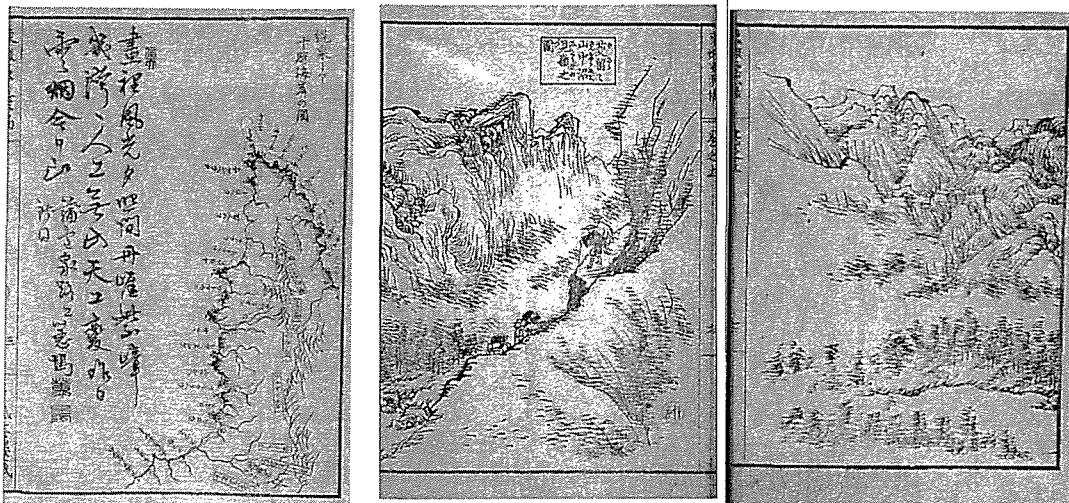


図13.「東蝦夷日誌(六)」(1857)松浦武四郎 図14. 東蝦夷夜話(1861)(函館市中央図書館蔵)
(北海道大学附属図書館北方資料室蔵)

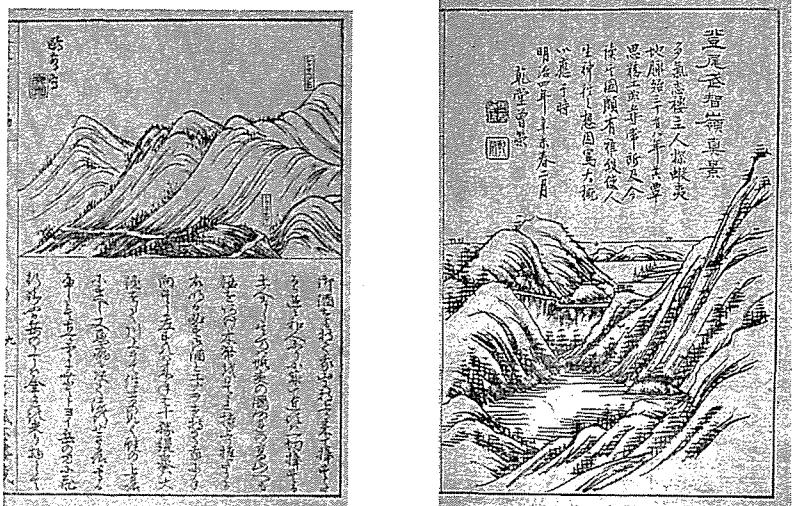


図15.「東蝦夷日誌(六)」(1857)松浦武四郎
(北海道大学附属図書館北方資料室蔵)

図16.「東蝦夷日誌(六)」(1857)松浦武四郎
(登尾武智嶺真景)
(北海道大学附属図書館北方資料室蔵)

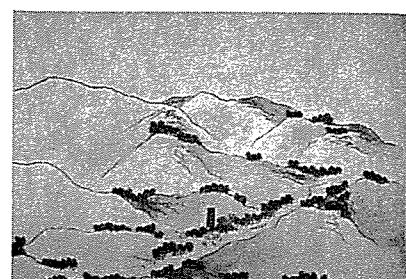


図17. 東蝦夷屏風から
(函館市中央図書館蔵)



図18. 東蝦夷屏風(アツトイ休所、図17. を拡大)

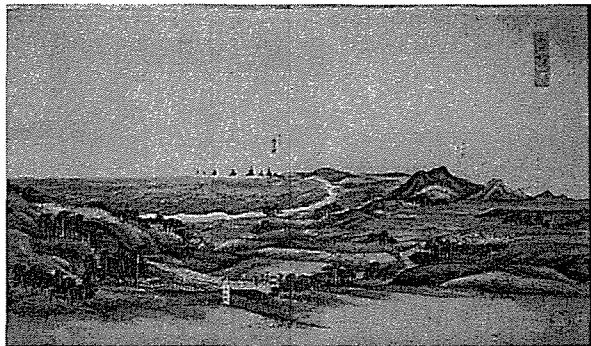


図19. 目賀田帯刀「北海道歴検図」(1859頃)
(小田別)

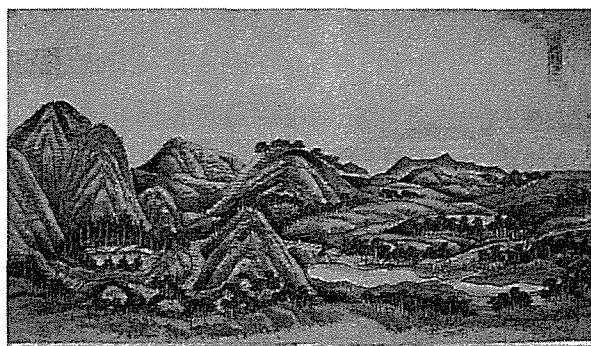


図20. 目賀田帯刀「北海道歴検図」(1859頃)
(小田別其二)

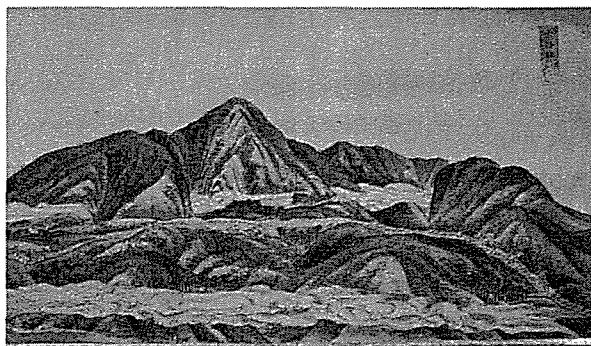


図21. 目賀田帯刀「北海道歴検図」(1859頃)
(古路経)

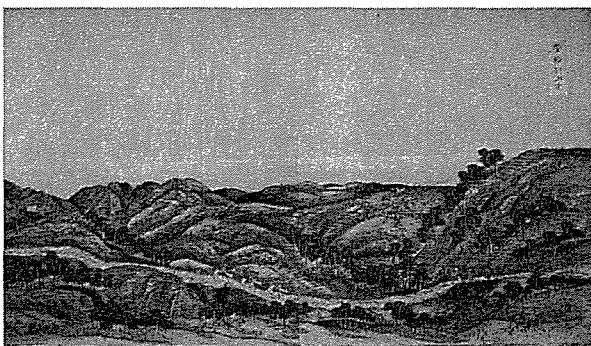


図22. 目賀田帯刀「北海道歴検図」(1859頃)
(登輪別山中)



図23. 目賀田帯刀「北海道歴検図」(1859頃)
(図20. 小田別其二の拡大)



図24. 目賀田帯刀「北海道歴検図」(1859頃)
(図22. 登輪別山中の拡大)



図25. 目賀田帯刀「北海道歴検図」(1859頃)
(図22. 登輪別山中の拡大)

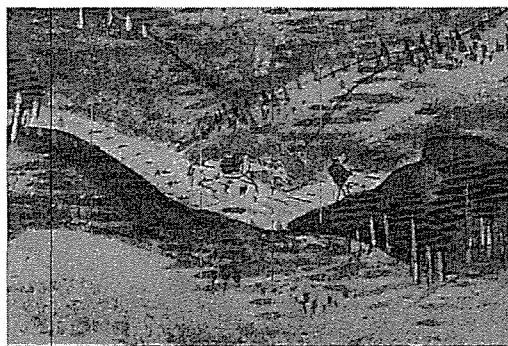


図26. 目賀田帯刀「北海道歴検図」(1859頃)
(図22. 登輪別山中の拡大)

(目賀田帯刀「北海道歴検図」(1859頃)、北海道大学附属図書館北方資料室蔵)

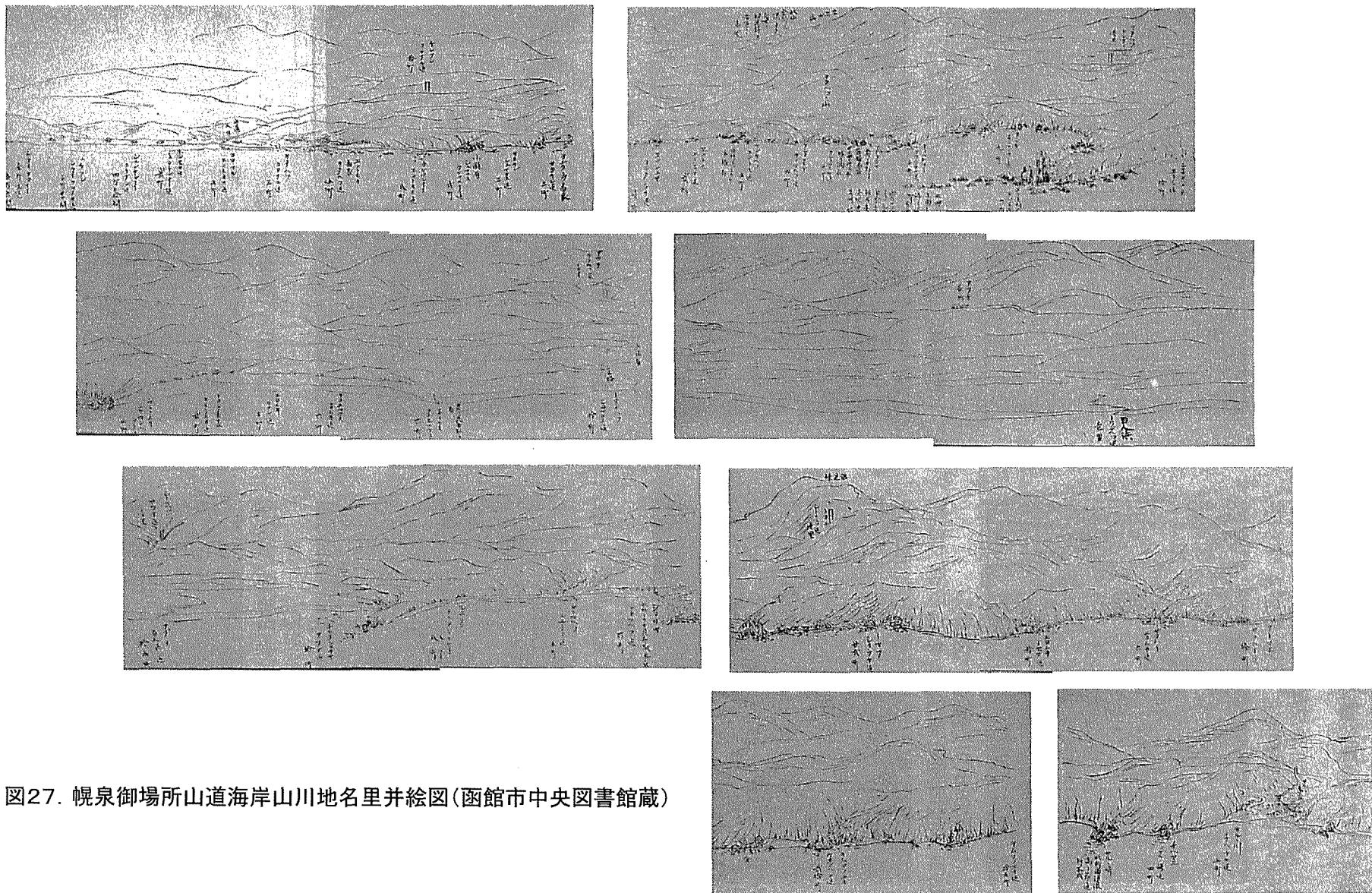


図27. 幌泉御場所山道海岸山川地名里并絵図(函館市中央図書館蔵)



図28. 針広混交林内の猿留山道



図29. 樹林帯からササ草原を通る猿留山道



図30. 猿留山道沼見峠から見る
豊似湖(カムイトウ)



図31. 猿留山道沼見峠ある江戸時代
建立の石碑二体

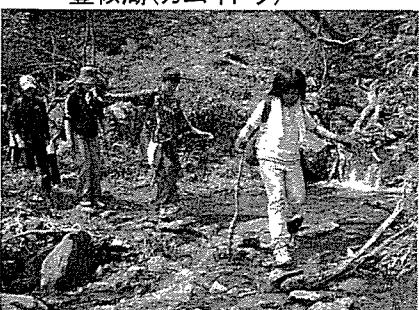


図32. 山道途中の沢、

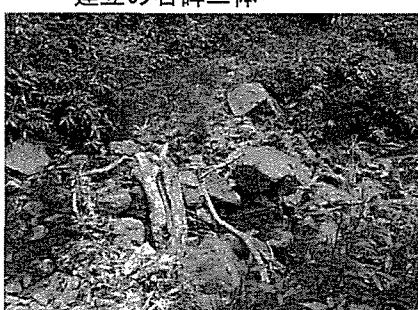


図33. 図32. を別角度で撮影、歩きやす
いよう石が積まれている(遺構)。

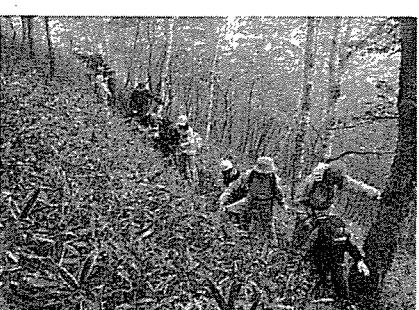


図33. 猿留山道復元ボランティアの様子



図34. 猿留山道復元ボランティアの様子

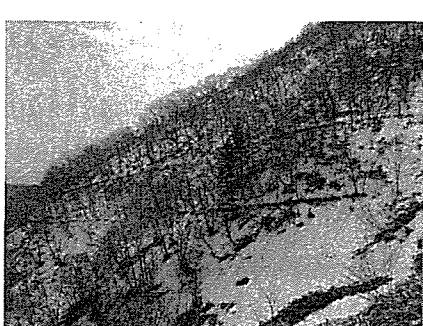


図35. 改修され二本の経路が確認され
た地点。上の道は土砂崩れで分
断されており、下の道を復元。



図36. 猿留山道アツ小休所付近から
の景色、江戸時代の絵図そのもの。
(図19. と比較)

VIII. まとめ

16点の江戸時代の文書・紀行文、25点の絵図、確認調査や復元事業などから、まとめると以下のとおりである。

- 1) 蝦夷地において、猿留山道は江戸幕府により寛政十一年（1799）に最初に開削された山道の一つである。
- 2) 江戸幕府が北方警備に必要な道として、官費直轄事業として開削された。
- 3) 山道が開削されても、嵐の時などは海岸を通行した。山道から東海岸の庶野へ通じる道もある。
- 4) 山間部を抜ける蝦夷地有数の難所である。
- 4) 山道は、馬（乗馬、駄馬）、駕籠も通行できるよう整備されていた。
- 5) 冬期間の通行の記録がある。
- 6) 猿留山道は東蝦夷地の重要で危険な経路として記載されている。
- 7) 通行屋、小休所、腰掛け、一里標等が設置整備されていた。
- 8) 当時の通行の様子は、特に「北海道歴検図」（図19～26.）に乗馬、駄馬、徒歩などが詳細に描かれ、通行の賑わいを知ることができる。
- 9) 猿留山道は現在約9kmが現存し、下草刈りなど整備され歩行が可能である。
- 10) 小休所、腰掛け、一里標などの遺構は確認されていないが、法面、積石などの遺構は確認できる。
- 11) えりも町文化財に指定され、保存と活用の努力がなされている。

IX. 引用文献

- 1) 「5萬分の1地質図副説明書 幌泉」（1956）工業技術院地質調査所。
- 2) 「5萬分の1地質図副説明書 猿留」（1956）工業技術院地質調査所。
- 3) 「5萬分の1地質図副説明書 襟裳岬」（1956）工業技術院地質調査所。
- 4) 「北海道道路史」（1990）北海道道路史調査会編。
- 5) 「新北海道史第二巻通説」（1970）北海道。
- 6) 「広尾町史」（1960）広尾町。
- 7) 「中標津町史」（1981）中標津町。

- 8) 「黒松内町史 下巻」（1993）黒松内町。
- 9) 「東蝦夷道中記」（1791）えりも町史（1971）より引用。
- 10) 近藤重蔵から古河古松軒への通信
えりも町史（1971）より引用。
- 11) 「蝦夷草紙」最上徳内著、吉田常吉編、時事新書。
- 12) 「休明光記二巻」（1799～1800）羽太庄左衛門正養。<森資料>
- 13) 「蝦夷紀行」（1799）谷元旦、えりも町史（1971）より引用。
- 14) 「蝦夷干役志」（1800）伊能忠敬。
<森資料>
- 15) 「蝦夷の島踏」（1801）福居芳麿、えりも町史（1971）より引用。
- 16) 「蝦夷道中記」（1801）磯谷則吉、えりも町史（1971）より引用。
- 17) 「蝦夷日記」（1808）児島紀成、えりも町史（1971）より引用。
- 18) 「仙台よりクナシリ迄往来日記道規細抄」（1808）高屋養庵。<森資料>
- 19) 「東行漫筆」（1809）新井保恵、「北方史史料集成第一巻」（秋葉実編）北海道出版企画センター。
- 20) 「日鑑記」（1821）「日鑑記 解説研究 第2集 厚岸町立教育研究所編」
- 21) 「蝦夷日誌」（1845）松浦武四郎、「校訂 蝶夷日誌【一編】」（秋葉実翻刻・編）北海道出版企画センター。
- 22) 「蝦夷紀行」（1854）忠蔵（尾張屋番屋）、「蝦夷紀行」（成田修一編著）沙羅書房刊。<森資料>
- 23) 「竹四郎廻浦日記」（1856）松浦武四郎、「竹四郎廻浦日記 下」（高倉新一郎解説）北海道出版企画センター。
- 24) 「東微私筆」（1857）成石修、「東微私筆」（大野良子編）政界往来社刊。
<森資料>
- 25) 「罕有日記」（1857）森一馬。<市立函館図書館蔵、えりも町史（1971）より引用。森資料>
- 26) 「東蝦夷日誌」（1857-58）（山川地理取調紀行）「東蝦夷日誌」（吉田常吉編）「新版蝦夷日誌 上、東蝦夷日誌」時事通信社。
- 27) 「戊午東西蝦夷山川地理取調日誌」（1858）松浦武四郎、「戊午東西蝦夷山川地理取調日誌・下」（高倉新一郎校訂 秋葉実解説）北海道出版企画センター刊。